

Graded Readersの読書を通して「主体的・対話的で
深い学び」を実現するための理論的考察：
H. G. WiddowsonのCapacity論を軸として

水野, 邦太郎

<https://hdl.handle.net/2324/1866368>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（比較社会文化）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏名	水野 邦太郎			
論文名	Graded Readers の読書を通して「主体的・対話的で深い学び」を実現するための理論的考察 — H. G. Widdowson の Capacity 論を軸として —			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	井上 奈良彦
	副査	九州大学	教授	松村 瑞子
	副査	九州大学	准教授	志水 俊広
	副査	九州大学	准教授	李 相穆
	副査	熊本県立大学	教授	吉井 誠

論文審査の結果の要旨

本論文は、英語学習者が辞書に頼らずに読書ができる「98%以上が既知語」(Nation, 2009)で書かれた Graded Readers (GR) の読書を通して、英語独自の思考・表現様式を主体的に味わいながら英文を解釈し、既知語の使い方の理解を深める学びを実現するための理論的枠組みに関する研究である。

GR は学習者のために段階別に語彙と文法が制限された読み物である。学習者は、様々なトピックについて書かれた GR から、98%以上が既知語で書かれた本を選ぶ。そして、具体的な文脈(物語)の中で自分が現在持っている潜在的な言語知識を使いながら、英文の意味を解釈し、心の中にディスコース(物語の世界)を創り出していく。同時に、既知語の使い方に対する気づきや発見を付随的に得ることを通して、既知語の使い方に対する理解を深めていく。これを効果的に行うには、教師が GR の英語の語彙(単語の使い方)について明示的に学習者に教授し「インプット処理指導 (Input Processing Instruction)」(VanPatten, 2009)を行うことが必要である。この教育的介入を取り入れた GR の読書教育の理論的枠組みを、本論文は Widdowson (1983a)の「Capacity 論」を軸に、認知言語学における「使用基盤モデル」(Langacker, 2000)と「触媒的インタフェース・モデル」(山岡, 1997)を融合させた「Capacity モデル」として構築し、理論的に具体的に提示したものである。

英語の語彙について明示的にインプット処理指導を行う際にその教授内容の選択を支援する方法として、GR の一つである Oxford Bookworms (OBW)シリーズの英語コーパスを構築した(各段階 10 冊、計 60 冊)。そして、OBW コーパスを認知言語学における使用基盤モデルの観点(慣習的な言語単位、トークン頻度、タイプ頻度、軸語スキーマ)から分析することの有効性を、look(動詞)を例に具体的に示している。look は日本の中高生にとって「見る」「～のように見える」という意味で馴染みのある既知語であるが、look を使えるようになるには、そのような日本語による一対一対応のレベルでの既知の理解から脱却を図る必要がある。そこで、本論文では、使用基盤モデルの観点から分析して得られた OBW の look の使い方についての性質特徴を、学習者が潜在的な言語知識として持ち実際に読書で使うことを通して、OBW の読書を通した主体的・対話的で深い学びが期待できることを論じている。

また、OBW シリーズの look の使い方が、段階が上がるにつれてどのように変化するかを調査した。段階間の look の使い方の違いを見る切り口として、look を軸語とする「look + -ly」「look + 形容詞」の軸語スキーマにおける -ly 副詞と形容詞を、CEFR-J (投野, 2013)が設定した英単語の学習難易度と対応させた。その結果、CEFR-J の難易度の高い -ly 副詞と形容詞の事例が、段階が上がるにつれて多く使用されていくことがわかった。各 Stage の -ly 副詞と形容詞の事例リストは、「look + -ly」「look + 形容詞」の軸語スキーマを教師が学習者に形式・処理教授する際のデータ・ベースとして利用することができる。

さらに、OBW の look に関する言語知識を使って、Ungraded な英語で書かれた *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* (Rowling, 1999)を読む場合、OBW の look に関する言語知識を用いて、同じように Harry Potter の look の使い方の理解を深められることを示した。Ungraded と Graded の相違点は、「look + -ly」「look + 形容詞」において -ly 副詞と形容詞にいくつかの違いがあった。

共通点は、慣習的な言語単位のトークン頻度のほとんどが1であった。つまり、OBW60冊を読んでも、通常の小説を一冊読んでも、ほとんどの慣習的な言語単位との出会いは一回限りである。したがって、効率と効果を重視する学校英語教育において、慣習的な言語単位の習得は読書による付随的語彙学習と意図的語彙学習の両方が必要であることを示している。

以上のように本論文は、技能的な側面に着目する傾向の強い英語教育において、視野を広げて事象を捉え認知能力育成に焦点を当てている点において斬新であり、かつ実用的な研究である。理論研究として、Widdowson の Capacity 論を起点に、申請者の経験と研究を踏まえ、自らのモデルを発展させて行ったことは評価に値する。実用的には、インプットの量が極端に少ない現状の英語学習環境において、Graded Readers の活用は重要で具体的な示唆に富む提案である。以上の点から本論文の内容は博士（比較社会文化）の学位に値すると判断した。